



史傳

黒澤登幾子傳補遺

下村三四吉

余は、本誌第二卷第九號に黒澤登幾子の事歴を掲載し始め、爾後數號に互りて完結せりき。その間、本年三月の末水戸に遊び、登幾子の事蹟に就きて聊か聽き得たる所あり、又幸にして郡司篤信氏の編述にかゝる『古今烈女時子』と題せる一書を獲たり。該書は、即ち黒澤登幾子の傳記にして、その末に、登幾子が藩主水戸齊昭公の冤を雪がんとて京都に上り、拘囚の身となりて江戸に送られ、遂に中

追放の刑に處せらるゝまでの自叙記を附載したり。前者たる傳記の部は極めて簡略なれど後者たる附録は叙述頗る詳密にして登幾子の事歴中最も精采ある部分の委曲を知ることを得べし。よりにて、余は該書に據り、本誌上掲載の拙稿につきて、二三の補遺をなさんと欲す。

○登幾子が、京都にてかの長歌進達の計畫を遂げて、大坂に赴き、こゝにて町奉行配下の同心に捕縛せられて獄に下りしときの狀況につきて自叙記の述ぶる所は左の如し。

……おもひ出せば、十八年以前野州那須の湯にて夏中諸共に遊び居しものあり、……その人は先の連合に別れて、今は天満六丁目の皮綿屋伊兵衛といへるもの、方へ再嫁いたし候由に

て彼の所へ案内致され、……………十八年が其間
 の昔談終夜語り合ひ、古郷へ歸りし心地して
 其夜は心安かりけり。明くれば、四月朔日……

……裏座敷にて風流雅たる物語など致し、去る
 大鹽平八郎の實録など出して繰りかへし、感涙
 袖をうるはしける。……………隠居なる老母弟子

三人連にて錢湯へ入、一丁四方の皮綿屋が地面
 を廻りて立歸る。……………皮綿屋が軒下にて同

心二人内より出で、京より御頼にて御尋の筋あ
 りといふて、林より捕繩を出し、内手にしぼり
 て連れ行かる。行年五十四歳始めて天下の爲に
 御繩を蒙る。其夜は三ヶ所連れあるかれたり。

曇りなき心のそのますかぐみ

うつして見ませ日本言の葉

とよみて、出しければ、一人の同心申すやう、

何じややらぐつ／＼してわからんじや、又一人
 の同心申すやうナニサえらひもんじやわいナア
 ナア歌はトントわからんじや、發句なれば少し
 はわかるさかいナア左様ならば御題をといひけ
 れば盤の題にて、

飛ぶはたるなにはのあしの露ゆかし

ヲ、それはえらふかもしろいはいナア。

それより、角力之介殿夜更けて少、吟味あり。

そちがいふことはトトわからんじやさかい、こ
 ちでいふこともわからんじやらふナア。仰せ下
 されます御言葉は一々私はわかります、私の申
 し上げます言御わかりに成りませぬことは御間
 ひかへし下されまし。夜更けて少々吟味ありて
 旅道具の中より長歌の下書を見出さる。それよ
 り同心衆にいざなはれ、夜七ツ時のころはひに

始めて牢屋敷の揚屋へと連れゆかれ、大門口にて衣服帶残らずきぬ類をば襟くちまでもはぎとられ、髪もあばきて櫛かんざしも取あげ、牢屋敷の大門を開き入れらる。……………

右の文中「行年五十四歳始めて天下の爲めに御繩を蒙る」の一句、僅々二十餘言の中に、己れの老年の身たることを表示し、罪を被ふれるは國家の爲めなることを明かにし、しかも驚かず躁がず、泰然として縛に就けるの狀躍然として見るべく、斗牛をも衝くべき義憤の意氣を被ふに従容安靜の態度を以てす。何ぞ情致の沈摯にして婉約なるや登幾子その人の修養想ふべし。

○大坂にて一應の糺問を受けたる後、登幾子は更に京都に送られたり。

……………大坂御役所へ又召出され、山本善之進

殿、角力之介殿御兩所其外の同心等御いとまをたまはり、京の御手先繩をかけ替る。御氣のどくだがおまへじやさかいなアつよくはおませんかといたはる言葉のいとやさし。さすが京士の御手先深きめぐみぞありがたき。それより、淀船に乗せられ、京都より御請取の御役人大塚圓藏、……………大塚の曰く、大坂の同役より委細承りしが、其方事は、天下のため忠臣のために出で来りしと申す、感心致した。心配いたすな京へ行ては存分に申し上げ、はやふ御免になるやふに致されよ、必ず心配致すな。と、力を添ふるめぐみの言葉、實に武士の習ひとて、礼もき忠義をくみて知る情のほどぞ有りがたき。

綱手をいそぐ引舟の引手おそしと夕まぐれ、伏見へこそは着きにけれ。それより伏見の船宿へ

上りて、繩をほどきて、支度をなをし、召人駕籠に乗せられて、いそぐつゝ、みの庭の道、寒さはいとい身にしみて、比は卯月の十三夜月の影さへはれやらぬ心の底はとこやみのあやめもわかぬくらまぎれ、夜更けて京へ着にけり。其夜は牢屋敷の會所に置かれしが、翌十四日揚り屋を掃除して入れらる。……………向ふなりける十二疊敷の内には鷹司殿の大夫なる御方青木右京之介殿、隣なるは二條殿の大夫入江伊織殿、此方には皆水戸一件の御儀につき捕となりしなり、晝夜番人六人つゝ、寝ずの番一時替りに入替る、七分三分の夜廻りあり、嚴重なること恰もゑんま王廳の如し。……………

(つづく)



水仙花

雨峰生譯

谷また山を漂へる
孤雲の迹のさためなく
淋しくあたり彷徨へば
時しも目には一むれの
白衣金冠の水仙花
湖の畔や梅の蔭に
風にゆられてゆらくと
踊る姿のふと見えぬ

天の河原の明らけく
星の光りの断間なく
閃きわたる風情にて